1 世界について語ること (§2.1)

(1) 言語により世界について語る方法

a. 具体的な個体（individual）を**指示する** (refer)。
例：「夏目漱石」、「私の父」

b. 世界のありさまを記述する (describe)。言語表現は具体的な個体は指さないが、それが実際の事態に対応すれば、話し手はその言語表現が真であると判断できる。
例：「雨が降っています」

(2) **意義** (sense)［**内包** (intension)］と**指示** (reference)［**外延** (extension, denotation)］

a. 意義：使用コンテクストによらず一定

b. 指示：使用コンテクスト次第で変化

Q. (3) の具体例を使って、意義と指示の違いを説明しなさい。

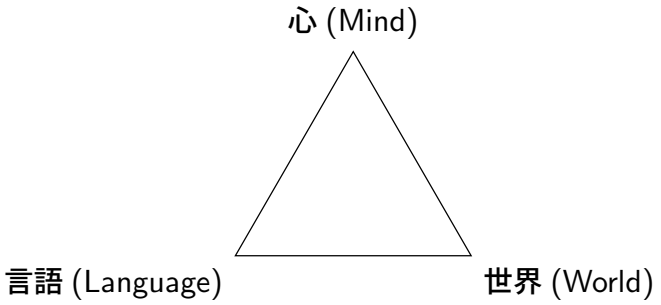
(3) a. 佐藤さんが**親しい友人**と食事をすると言っていたが、それは田中さんのことだ。

b. Salamat というのは**タガログ語の「ありがとう」**のことだ。

- 「げっ」、「えっと」、「へぇ」などは、具体的な個体を指示したり、世界のありさまを記述したりしないが、やはり何らかの意味を伝える。
- そのような意味は**表出的意味** (expressive meaning) と呼ばれ、**記述的意味** (descriptive meaning) とは異なる意味の次元 (dimension) に属す。

2 外延的意味論と認知意味論 (§2.2)

(4) 記号論の三角形



- 話し手が言語表現で表しているのは、外界世界そのものではなく、外界世界に対する話し手の**捉え方** (construal)、外界世界の心的表象 (mental representation)。
- **認知言語学** (cognitive linguistics) は、言語–心の関係を対象とする。
- だが、外界世界の心的表象が実際にどのようになっているかの直接的証拠を得ることは非常に難しい。（ので、実際の研究では話し手の感覚（＝人間の脳で考えた心的表

象）や間接的証拠を用いる。）

- **外延的意味論** (denotational semantics) では、言語–世界の関係を対象とする。（もちろん、外界世界は人間の目を通して見ることになるが、そのバイアスは言語–心を対象とする場合でも生じる。）
- 外延的意味論は、意味の構成性をうまく説明してきた。
- 外延的意味論で、言語と世界の関係を論じる際の 2 つの基本概念
  1. 真偽 (truth) → Ch. 3
  2. 指示 (reference) → 本章

3 指示表現の種類 (§2.3)

- 指示とは、世界の何かを「指す」こと。
- それは、聞き手の注意をそこに向けることであり、聞き手がその物を同定できるようにすることである。
  例：「林佳世子」「東京外大学長」「トルコ語科の女性教授」「『オスマン帝国 500 年の平和』を書いた人」

(5) **固有名** (proper name)

a. 林佳世子

b. 東京外国語大学

- 固有名はコンテクストが変わっても、常に同じ個体を指す。
- そのような特徴を持つ表現を、**固定指定子** (rigid designator) という。
- 自然類の名称（例：「ラクダ」、「タコ」、「ドリアン」）や物質名（例：「金」、「塩」、「メタン」）も固定指定子。

(6) **直示** (deictic) 表現［**指標詞** (indexical)］

a. 発話状況中の事物を指す。指示物は発話状況により変わる。

b. 「私」、「あなた」、「今」、「ここ」

(7) **照応** (anaphoric) 表現

a. 指示物が他の名詞句の指示物により左右される。

b. 参照される他の名詞句を**先行詞** (antecedent) という。

c. 直美 $_i$ は煙草を吸うので、タマは**彼女** $_i$ に近寄ろうとしない。

- 数量詞句は指示表現ではない。

(8) a. 代名詞の先行詞になれない：
[Every American male]$_i$ loves baseball; #he$_i$ watched three games last weekend.

b. 再帰代名詞をそれ自体で置き換えても、等価の意味が得られない：
すべての学生は自分自身を信じている
≠ すべての学生はすべての学生を信じている
cf. 健は自分自身を信じている = 健は健を信じている

c. 指示的名詞句との比較ができない：
#すべての学生は教員よりも多い。
cf. 学生は教員よりも多い。

Q. (8b) の 2 文はなぜ等価でないのか？

- 代名詞が数量詞句を先行詞とする場合、その代名詞は指示的でない。値は数量詞句に合わせて変化する。
- そのような代名詞は**束縛変項** (bound variable) と呼ばれる。

(9) [Every boy]$_i$ should respect his$_i$ mother.

- **普通名詞** (common noun) は、指示的にも非指示的にもなる。
- **定** (definite) 名詞句［**確定記述** (definite description)］は、指示物が一義的に同定できることを表す。

(10) 指示的な定名詞句

a. この本
b. 第 100 代内閣総理大臣
c. 私の兄

- 言語によっては、定名詞句が**総称的** (generic) に用いられる[*1]。その場合の定名詞句は指示的ではない。

(11) Life's battles don't always go
To *the stronger or faster man*,
But sooner or later *the man who wins*
Is *the one who thinks he can*.

（人生の戦いで勝つのは
強い側や速い側とは限らない。
だが、いずれ勝利者となる者は
自分が勝つと思う者だ。）

- **不定** (indefinite) 名詞句は、指示的にも非指示的にもなる。

[*1] ある定名詞句が総称的に用いられているかどうかは、「一般に」のような表現を追加してみることで確認できる。意味に変化が生じなければ、その定名詞句は総称的に使われていると言える。

(12) a. **特定** (specific) の解釈：指示的
My sister has just married *a cowboy*.
b. **非特定** (non-specific) の解釈：非指示的
My sister would never marry *a cowboy*.
c. 特定・非特定が曖昧
My sister wants to marry *a cowboy*.

Q. 英語では名詞句の定・不定が冠詞により示される。日本語にはそのような冠詞はない。他の言語では、どのように定・不定の区別を表すか？

(13) トルコ語 (Enç 1991:4–5)
a. Ali bir piyano**-yu** kiralamak istiyor.
Ali one piano-ACC to-rent wants
'Ali wants to rent a certain piano.'
b. Ali bir piyano kiralamak istiyor.
Ali one piano to-rent wants
'Ali wants to rent a (nonspecific) piano.'

4 意義と外延 (§2.4)

- フレーゲ (Gottlob Frege, 1848–1925) は、2 つの種類の意味を区別した。

意義 (Sinn, sense) 具体的な使用コンテクストに左右されない。辞書的な意味。
外延 (Bedeutung, denotation) 具体的な使用コンテクストに左右される。
【表記法】⟦ 言語表現 ⟧
- 指示表現の外延：そのコンテクストにおける指示物
- 内容語（形容詞、動詞、普通名詞など）の外延：そのコンテクストでその表現が記述する個体すべての集合
例：「黄色い」の外延（⟦ 黄色い ⟧）は、黄色いものの集合
- 文の外延：真偽値

Q. (14a–d) の意義はすべて異なる。では、外延はどうか？

(14) a. 林佳世子
b. 東京外大学長
c. トルコ語科の女性教授
d. 『オスマン帝国 500 年の平和』を書いた人

- 意義は外延を決定する。つまり、意義を知っていれば、外延が分かる。
- 2 つの表現の意義が同じならば、外延も同じ。そのような 2 つの表現は、**同義的**

(synonymous) であるという。

- 外延が同じだからといって、意義も同じとは限らない。

(15) a. 明けの明星、宵の明星
b. 最大の陸生哺乳動物、アフリカゾウ
cf. パラケラテリウム（紀元前三千万年、頭胴長約 8 メートル、肩高約 5.5 メートル、体重約 15〜20 トン）

- 外延（指示物）がないことは、意義がないことを意味しない。
- 意義はあっても、外延が存在しないこともある。

(16) a. フランスの現在の国王
b. 最大の素数
c. 庭のユニコーン
d. 緑のアイデア
cf. Colorless green idea sleeps furiously. (Chomsky 1957)

5 曖昧性 (§2.5)

(17) **曖昧性** (ambiguity)
a. **語彙的曖昧性** (lexical ambiguity)
b. **構造的曖昧性** (structural ambiguity)
c. **指示的曖昧性** (referential ambiguity)

(18) 語彙的曖昧性
a. 彼の発言はどこか**おかしい**。
b. 弟が金に困っていたので、追加の仕事を**やる**ことにした[*2]。
c. **おじさん**は有名人だ。

(19) 構造的曖昧性
a. 男の子と女の子の母親
(i) ［男の子と女の子］の母親
(ii) 男の子と［女の子の母親］
b. 健が好きな人
(i) ［健が $\text{pro}_{\text{対象}}$ 好きな］人
(ii) ［$\text{pro}_{\text{経験者}}$ 健が好きな］人
c. One morning I shot an elephant in my pajamas. How he got into my pajamas I'll never know.

[*2] この文には指示的曖昧性もある。

(i) I [shot an elephant] [in my pajamas].
(ii) I shot [an elephant in my pajamas].

(20) 指示的曖昧性

a. Adams wrote frequently to Jefferson while *he* was in Paris.
b. 美千代は［pro 東京にいるうちに］陽介に会うつもりだ。
c. ［2 人以上の指導学生を抱える大学教員の発話］
私の学生が言語学会で発表することになりました。

6 表出的意味 (§2.6)

- 「げっ」や「えっと」などは、具体的な個体を指示したり、文が真となる条件を決めたりしない。
- そのような意味は**表出的意味** (expressive meaning) と呼ばれ、**記述的意味** (descriptive meaning)［**命題的意味** (propositional meaning)、**真理条件的意味** (truth-conditional meaning)］とは異なる意味の次元に属す[*3]。
- 多くの言語表現は、二種類の意味を同時に持っているので、二つを区別することが大切。

表出的意味の判断テスト

1. 独立性 (independence)

- 表出的意味は記述的意味（名詞句の指示物、文の真偽値）と独立。
- 聞き手が記述的意味にのみ同意し、表出的意味には同意しないことも可能。

(21) A: 今日、佐々木の**野郎**、見ねえな。
B: そうだな。佐々木**先生**どう**なさっ**たんだろう？

2. 非転移性（その場性）(nondisplaceability)

- Hockett (1958, 1960) は、人間の言語の特徴の 1 つとして**転移** (displacement) できることを指摘している。
- 話し手は言語により、「今ここ」以外の事態についても語ることができる。
- 表出的意味は、転移性を持たない。つまり、「げっ」や「えっと」を過去や未来のことや、別の場所のことについて使うことはできない。

3. 免疫性 (immunity)

- 否定、疑問、挑戦は、記述的意味にのみ影響し、表出的意味は元のまま。

[*3] 記述的意味と表出的意味は、**概念的意味** (conceptual meaning)（または**辞書的意味** (dictionary meaning) と**非概念的意味**とも呼ばれる。国語学では、表出的意味は**感情的意味**と呼ばれる。

(22) 否定

a. 私は困った事態に直面していない。

b. *げっない。

(23) 疑問

a. あなたは困った事態に直面していますか？

b. *げっ？（「『げっ』だと？」の省略としては OK）

(24) 挑戦

a. 困ったことになりました。—嘘をついても無駄だ。何も問題なんてないじゃないか。

b. げっ！—#嘘をついても無駄だ。

4. 尺度性 (scalability)、繰り返し可能性 (repeatability)

- 表出的意味は繰り返しやイントネーション的特徴（高さ、長さ、声の大きさ）により、程度がより強いことを表すことができる。

(25) a. げっ！

b. げーっ！

5. 記述的言い表し難さ (descriptive ineffability)

- 表出的意味はしばしば記述的な意味により適切に言い表すことができない。
- 記述的意味はパラフレーズにより説明できる。例：「ひよこ」＝「鶏のひな」
- 表出的意味はパラフレーズによる説明が難しいため、定義によりその意味を説明するのが普通。
  例：「げっ」は困難な事態に直面したときの困惑の気持ちを表す。

参考文献

Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton. （福井直樹、辻子美保子（訳）『統辞構造論 付『言語理論の論理構造』序論』岩波文庫.）

Enç, Mürvet. 1991. The semantics of specificity. *Linguistic Inquiry* 22:1–27. URL `https://www.jstor.org/stable/4178706`.

Hockett, Charles F. 1958. *A Course in Modern Linguistics*. New York: Macmillan.

Hockett, Charles F. 1960. The origin of speech. *Scientific American* 203:88–96.